

## プロジェクト概要

溝内紳之

ILCP プロジェクトマネジャー

### 1. 背景とSCCの努力

“ストリートの子供を救いたい”という願いが、初めにあった。ナイロビの最大のスラム、人口50万人ともいわれる大スラム・キベラのケニヤッタ・マーケットにたむろする子供たちである(コーナー1, 2, P63,64 参照)。給食、傷の手当て、識字教室というSCC(Save the Children Centre)の「Entry Point」の活動が始まった。なお、SCCは、1984年設立の、個人の寄付金や、民間団体の寄付などの自己資金で、「マトマイニ・チルドレン・ホーム」という孤児院を、運営しているNGOである。この「Entry Point」の活動を通して、子供達との距離感が縮まり、顔見知りになり、いろいろの話が出来るようになった。

1994年、マーケットの間仕切りの一隅(番号“C9”)を借りて、識字教室、傷の手当て、の無料サービスを常時行った。子供達の話やゆっくり聞いてやる場と機会が出来た。そして子供達の背景にあるスラムの闇が見えてきた。稼ぎのない家族、かまってくれぬ余裕のない家族、病気の家族、父親の暴力、飲んだくれの父親、無力な母親、蔓延する麻薬、暴力、家賃が払えず寝る場所のない家族、行き場のない下水と汚物の腐敗臭(コーナー3, 4)。

「Entry Point」の活動は、対象が、「ストリート・キドレン」だけでなく、子供達の母親、「ストリートの若者」ひいては、「ストリート・ガール」達にも広がった。

子供達の中には、家出をして所謂『ストリート』に出てきた『ストリート・キドレン』と、『ストリート』に出る手前の子供達も多い。子供達の悩みをひたすら聴いてやると、「お腹がすいている」、「寝る場所が決まっていない」、「学校へ行きたい」、「家族と一緒にいたい」、「普通の生活の戻りたい」、また大きな子供は、「稼げる仕事がしたい」、またシンナー中毒の子供は、「シンナーをやめたい」などというものであった。

学校へゆきたい子には、C9の識字教室へくること、家族に問題がある子には、家族に会うために、家庭訪問をした。

飲んだくれの父親、無力な母親、バラバラになった家族のメンバー、などの根の深い問題の前には、SCC(Save the Children Centre)というNGOの努力の枠では、無力に近かった。

### 2. プロジェクトILCPのスタート

活動の枠を広げるために、一定量の大きな資金枠の元で、プロジェクトILC

P (Improvement of Living Conditions of the Poor)がスタートした。JICAの新しいスキーム、主としてNGOの活動を支援する「開発パートナー事業」であった。

## 2. 1 スタッフとプロジェクトの基本姿勢

フルタイムのスタッフを20人弱（現在：14人）雇用した（Fig. 1）。スタッフは、高等教育を受けたエリートではなく、高校程度の教育を受けた人達で、援助という仕事には未経験の、スラム育ちの人が半数近くいて、スラムの事情には通じていた。なかには、看護師の資格のある人、ソーシャルワーカーの資格のある人なども含まれていた。人材は豊富であった。

ILCPの支援の対象は、従来と違って、『ストリート・ルドレ』だけに限らず、広くスラムの住人と決めた。対象のスラムも、キベラだけでなく、4スラムに拡張した。ナイロビ第2の大きいスラム・マザレ、小規模スラムのミツンバ、新興スラムのシティ・カートンを含めた。

## 2. ILCPの基本方針とアプローチ。

貧窮の住民を援助するに当たっての基本方針は

- (1)「支援として援助はするが、依存心を育てることはしない」従って、「お金やモノをあげない」こと、
  - (2)「依存心ではなく、自立心を育てる」後押しの支援をすること。
- である。

また、手段としてのツールは、二つである。

### 1. カウンセリング（コーナー9）

「対象者の悩みを聴く」こと、「何が問題か、貧窮者が自分で考える」こと、スタッフは答えを準備しないし、与えない。「貧窮者が、何をしたいのか、自分の力で掴み取らせる」こと。

### 2. PCM(Project Cycle Management)法（コーナー10）

プロジェクトの活動、期待する成果、達成する目標を予め一定のロジックで決めて、プロジェクトを計画する方法であるが、NGOに有り勝ちな思いつきで活動することを避けることを意図した。一つ一つの活動が、成果や目標に結びついているロジックを、日々の活動の中で確認することにした。住民との会話に、この手法が使用され、問題分析に利用される場面も、出てきた。

## 3 ILCPの活動。

スタッフの仕事は、カウンセリングを基本業務としながらも、

1. 「Entry Point」の活動、給食（コーナー5）、傷の手当て、識字教室の継続（コーナー6）

2. 子供達のリハビリテーション、
  3. 家族達の EMPOWERMENT (「稼ぐ力」を着けさせること)
  4. 健康・衛生問題の啓発と教育、
  5. 他のNGOとの共同協力作業。
- である。

### 3.1 「Entry Point」とリハビリテーション

ILCPの「Entry Point」の活動は、給食、傷の手当て、識字教室に加えて、青空音楽教室(コーナー8)、サッカーによるボールリハビリ(コーナー7)が加わった。

青空音楽教室は、毎週土曜日の午後、オフィスの庭を開放して、約2時間、歌を歌ったり、踊りを踊ったりする。地元のプロ音楽家グループの支援で始まった。いろいろの歌を歌う。毎回60人程度の参加者だが、音楽好きの毎週来る常連がかなりいる。参加するには、シンナーを吸ってこないことが条件だ。庭のゲートには、スタッフが立っていて、一人一人子供をチェックする。CDを2枚作ることが出来た。

ボールリハビリは、ストリート・フットを牛耳るストリートの若者達との接点を作った。ストリート・フットのハードコアともいべき20歳前後の青年達である。スラムからほど遠くない広いグラウンドを借りる。精一杯走り、ボールを蹴る。日頃のたまった鬱憤やイライラが、心地よく発散する。良いプレーをするためには、シンナーを絶って、準備してくる。仲間の存在も大切だ。そして、前向きな気持ちが出てくる。若者達は、スタッフにうち解けてくる。いろいろの会話が成立し、カウンセリング始まる。

### 3.2 リハビリとストップ・リハビリ

子供達とのカウンセリングを通して、シンナーをやめたい子供、通常の生活に戻りたい子供は、リハビリ(リハビリテーション)を専門とするNGOの力を借りて、彼等の運営するリハビリ・センターに入れた(コーナー11)。リハビリテーション・センターは、ストリートの影響からの物理的隔離が第一義である。リハビリテーションを終えた子供は、ILCPオフィスでストップ・リハビリの段階にはいる(コーナー12)。毎日オフィスに通わせて、庭で遊ばせながら、観察し、カウンセリングを実施する。何をしたいか、時間をかけて、聞き出す。学校へ戻りたい子供は、親の意向を尊重しつつ、インフォーマル・スクール(寺小屋式学校)か、公立のフォーマルスクールか、または寄宿制の学校かを選ぶ。公立のフォーマルスクールは、授業料(現在無料、2003年1月にFree Educationが始まった)と、学校が指定する制服、靴、体操着、テキスト等を親が揃えなければならず、スラムの家族にとっては、手の届かない高額になるの

で、大抵は、うるさいことを求めないインフォーマル・スクールに進むか、また教育費を支援してくれる団体やグループの奨学資金をスタッフが探して、寄宿式（私立）学校へ入学させる。リハビリテーション・センターを終えて、学校には行かず、仕事に就きたいという子供は、少なかった。

### 3.3 EMPOWERMENT

ストリート・キッズの親は、「稼ぐ力」が足りないという問題を抱えている。教育を受けていない、スキルがない、資本がない、何をすれば良いか教えてくれる人も機会もない、というような状態の人達である。「稼ぐ力」を、身に付けさせるために、家族、特に母親達に、カウンセリングによって、何がしたいかを聞き出した。希望によって、いろいろの選択の道が開けるようにした。ILCPでは、「稼ぐ力」を着けさせることを、EMPOWERMENTと呼んでいる。

また、子供達の中で、学校よりも働きたいという希望のある子供については、徒弟制度の職業訓練で、スキルを付けさせることにした。裁縫、散髪、美容師、肉屋、自動車修理、靴磨き、などである（コーナー13）。道端で商売をやっている店の親方に頼んで、徒弟制度の弟子入りさせることである。親方への謝礼と子供達の交通費をILCPが負担した。スキルを付けると、独り立ちして、自立出来る。

これまでのところ、EMPOWERMENTには、以下の選択肢が代表的なものである。

#### (1) Small Business (コーナー14)

母親達の中で、過去に商売の経験があり、もう一度商売をやってみたいという人は多かった。野菜売り、炭・灯油売り、豆・米等の穀物売り、古靴売り、古着売り、魚の行商、揚げポテト売り等多様である。プロジェクトでは、金銭を与えず、商売を始めるのに必要な最低限度のモノを買い揃え、貸与する。帳簿の付け方を教えて、毎週スタッフが帳簿をチェックする。ある母親は、豚の頭を仕入れて、焼いて切り売りする商売を始めたが、その味と母親の愛嬌で、きわめて好調で、一家8人が余裕を持って食べてゆけるようになった。

#### (2) クラフト作り (コーナー15)

手先の器用な母親、商売の経験のない母親は、クラフト（民芸品）作りを選んだ。最初は、伝統的な工芸品、サイザル麻の編みものから始めた。母親達の中には、また母親たちの知人の中には、すばらしい腕前の人がいるのが分かり、全員が習って、腕前を向上させた。

グループのレベルが上がって、売り物が出来るようになった。

キベラの溜池には、ホテイアオイが繁茂しているが、これを採集して、乾燥して紐を作り、編みものにした。物珍しさも手伝って、好評である。また、このホテイアオイから、紙を漉いて、漉いた紙でさらに写真飾りフレームなどの工

芸品を作った。ILCPでは、ホテアオイの利用を宣伝するNGOからいろいろのスキルを習い、メンバーの間で習得・定着させた。

これらの作品は、町で行われるバザーに参加して(コーナー17) 制作者が直接販売し、買い手の意向を理解するように努め、商品に工夫を加えた。専門家の力を借りて、売れる魅力のある商品作りに励んでいる。クラフト作りの熟練者は、最近一家の家計を十分まかなえる人が、多数出てきた。

### (3) ビーズ細工(コーナー16)

ケニアには、マサイ族に代表される伝統的なビーズ細工がある。ILCPでは、伝統とは関係なく、身近に入手出来る材料で、ビーズ細工を始めた。スラムで作っている骨細工とか、いろいろのモノを組み込んで、そして母親達のセンスにも助けられながら、また、日本から専門家にも、短期間来てもらって、指導を受けた。現在、ネックレス、ブレスレット、携帯用ストラップなどが定番となって、ナイロビのお土産店(コーナー17) 日本からの観光客にも好評である。近々、ある日本のデパートの店頭にも並ぶ予定である。制作することよりも、むしろ幅広く販売して、定常的な売上のレベルを維持することが課題である。

### (4) 徒弟制度(コーナー13)

十分な学校教育を受けていない者が自立するには、自営業をするか、職人としてスキルを身につけることである。職業訓練校の場合、入学資格や、期間、授業料など、いろいろハードルがある。ILCPでは、街角のお店の親方に頼んで、お店を手伝いながら、スキルを身につけるアプローチを試みた。親方への謝礼と、入門者の交通費でとにかかく始まる。裁縫、散髪、美容師、肉屋、自動車修理、靴磨き等が対象である。どうも、入門者の天分と忍耐が必要なようである。比較的成功しているのは、美容師である。今後の課題を残している。

## 3.4 健康・衛生問題の啓発と教育

スラムの住民にとって、「稼ぐ力」がないことに加えて、病気が真摯な努力の足を引っ張る。劣悪な住環境、劣悪な食事による体力低下等が、病気を呼び込む。ILCPでは、スラムの住民や、スラムの Informal School での集団健康診断を、医療援助を専門とするNGOの協力で、実施した。また、ILCPに出入りをしている人達に、健康・衛生に関するワークショップを開いた。また、集団健康診断でエイズと判明した人達に、エイズ専門のNGOの協力を得て、医療支援をすると共に、EMPOWERMENTを行い、稼げる状態を作り、エイズ患者同士の仲間作りを実施した。これらの「病人グループ」のメンバーは、定期的に、オフィスに来て集まり、自分たちの問題を話し合い、笑い飛ばして、不安を解消している。メンバー同士の家庭訪問で、体調不調の仲間がいると、

元気な仲間が、家事を手伝っている。ILCPの看護師のスタッフが、定期的にメンバーの家庭訪問をしている。

#### 4．持続可能性への試み

2003年、プロジェクトILCPの契約期間の最終年になって、終了後の局面が心痛であった。支援者が終了後も自立可能な体制が出来るように、ILCPの[Entry Point]活動の一部を休止して、新しいグループ活動支援を展開させた。

##### 4．1 Informal School の自立支援

Informal School へはいろいろの支援をしてきた。給食が生徒達の通学率と授業への集中率向上に大変役立つので、豆やトウモロコシの給食材料を支給してきた。これらの学校、6校には、学校が収入を稼ぐ工夫を要請した。聖書の販売、バッテリーの充電器の製造販売、豆や穀物の卸売り、などの提案があり、支援を決めた。聖書の販売、バッテリー充電器の製造販売は、好調なようであり、給食は継続されている。

##### 4．2 クラフトグループの自立支援

クラフトグループの母親達は、キベラからオフィスの庭に集まってきて、作業している。材料もオフィスの支援で支給される。クラフトグループが、自分たちで、ホテアオイを採集し、スラム内で集まり加工出来るように、集会所設定の工夫をしている。

##### 4．3 各スラムの住民センター設定。

マザレには、マザレのスラムの青年達が作った Resource Centre という集会所がある。10トントレーラを改造した建物である。同種の集会所をキベラなど他のスラムにも設置し、住民達の自立努力を育むセンター作りを提案している。

#### 5 終わりに

2004年5月末、プロジェクトILCPは終了する。今後は、JICA内部のプロジェクトとして、JICA ケニア事務所を中核として、SCC に委託して事業は継続される。

今後は、持続性を目指したキャパシティ・ビルディングが主要目標となる模様である。スラムに構築されるセンターの中心リーダーの育成であり、自立を固く目指すメンタリティーを持った指導者の育成である。そして望むらくは、それらのセンターのネットワークの連携の上に立って、全体を指導出来るリーダーの出現が望まれる。

## 6 参考：ナイロビのスラムについて

当プロジェクトの対象活動地域は、マザレ(Mathare)、ミツンバ(Mitumba)、キベラ(Kibera)、シティ・カートン(City Carton)の4地域である。

ナイロビ市の住民の60%はスラムの住民であると言われている(資料#1)。SCCでは、ナイロビ市のスラムのサーベイを1998年に実施し、報告書として纏めている(#2)。サーベイでは、各スラムを踏査して、建っている小屋の数を数え上げた。当時の担当者から、1小屋あたりの平均居住者数が、18人前後との情報があったので、小屋の数から、スラムごとの人口を計算したのが、Table14である。計算上、ナイロビのスラムの全人口が、約108万人となる。

また、1999年に政府による国勢調査(#3)がなされている。この国勢調査のナイロビ市の人口が正しいとすると、ナイロビ市の人口は、214万人で、その50%が、スラムに住んでいるということになる。また、Table14の結果を、位置を確かめながら、地図上に記入したのが、Fig.3である。全体で、71箇所のスラムが、ナイロビ市内に散在しているのが分かる。人口の大きさで、色分けしてあり、赤いものほど、人口が多い。14番から22番が鉄道の線路沿いに集結して、赤く、集まっているが、これが、総称キベラ(Kibera)である。49番から54番までが川沿いに集結しているが、これが総称マザレ(Mathare)である。シティ・カートン(City Carton)は31番、ミツンバ(Mitumba)は23番である。Fig.4には、キベラの詳細をデジタルマップ上に示している。キベラは、長さ約3km、幅約1kmで囲める地域の中に入り、中央を鉄道が走っている。また、ILCPの主要な活動拠点、特に、ILCP事務所、ケニヤッタ・マーケット、C9、小規模ビジネス等の活動拠点も図示されている。

### 資料

- 1 . Geoff Sayer, "Kenya Promised Land?" An Oxfam Country Profile, Oxfam Publishing, GB, 1998
- 2 . SCC, "A Report on a survey on informal settlements in Nairobi city", JICA, 2000 March
- 3 . Central Bureau of Statistics, Ministry of Finance and Planning, Kenya  
"1999 POPULATION AND HOUSING CENSUS, Counting our people for Development  
Volume1 POPULATION DISTRIBUTION BY ADMINISTRATIVE AREA AND URBAN  
CENTERS"